

令和元年6月17日現在

機関番号：32614

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07093

研究課題名（和文）明治期キリスト者の神道観 近代日本キリスト教史と神道史の架橋に向けて

研究課題名（英文）Shinto Views of Christians in the Meiji Era: Toward Connections between Modern Japanese Christian History and Shinto History

研究代表者

齋藤 公太 (Saito, Kota)

國學院大學・研究開発推進機構・助教

研究者番号：40802773

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により、明治期のキリスト教徒の神道観に関する資料の調査を行い、その目録を作成するとともに、諸教派間で共通する神道観の枠組みが明らかになった。それは近代的な宗教概念や宗教進化論のもとで「神道」をキリスト教よりも下位の「宗教」としてとらえるというものであった。それにより一方で信教の自由を守ることを主張しつつ、「神道」をキリスト教受容の基盤とするという発想が可能になったのである。またこうした言説の背景にはしばしば「宗教」による国家的秩序の領導という観念が見られることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は近代西洋の政教分離や信教の自由の理念を背景に持ちつつ「神道」に対峙した明治期キリスト者を対象として取り上げたものである。その成果により、異なる文化間での政教関係モデルの衝突について考察する上で有益な歴史的事例を提供することができた。また従来相互に十分参照されていなかった近代日本キリスト教史と近代神道史の研究成果を接続することができた。さらに本研究は近代日本のキリスト者の神道観に関する資料目録や基本的枠組みの提示を通して、後続の研究の基盤を確立した。

研究成果の概要（英文）：Through this research, I surveyed materials on the Shinto views of Japanese Christians in the Meiji period and made inventories. Based on them, I clarified the framework of the Shinto views common among various Christian denominations. It was to treat "Shinto" as "religion" lower than Christianity under the modern concept of "religion" and religious evolution. This made possible the idea of making "Shinto" the basis of the acceptance of Christianity, while insisting on the one hand to keep religious freedom. It also became clear that in the background of these discourses the ideas of guiding the national order by "religion" were often seen.

研究分野：近世・近代日本思想史・宗教史

キーワード：キリスト教 神道 近代日本宗教史 近代日本思想史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年世界ではグローバル化のなかで様々な政教関係のモデルが衝突する事態が出現している。近代日本の事例、特にキリスト教徒の事例は、こうした状況をめぐる宗教研究の動向のなかで改めて重要な意味を持つものである。なぜなら、西洋的な国家と宗教の分離の思想を継承していた日本のキリスト者は、日本国家や民族と不可分に結びつけられていた「神道」という異質な存在と対峙しなければならなかったからである。彼らは自らの内にも日本の政教関係に基づく思想的伝統を抱え込んでおり、その葛藤から様々な興味深い言説が生み出されていった。そうした様々な試行錯誤の軌跡は、現代世界において多様な政教関係の対話を進める上での一つの参照例となるはずであり、その点が本研究の一つの背景であった。

本研究の背景には、より直接的には二つの研究動向が関わっていた。一つは近代日本のキリスト教史に関する研究である。戦後の日本キリスト教史研究では、キリスト教と天皇制の関係がしばしば主題となり、「国家神道」へも言及がなされるが、概していえばそれは天皇制イデオロギーの宗教的側面として扱われ、近代の神道が抱え込んでいた複雑な歴史的経緯が十分に顧慮されてきたとはいえない。

もう一つの研究動向としては、主として阪本是丸らの神道学者によって蓄積されてきた近代神道史研究がある。これらの研究では、近代の神道が単純に「国家神道」として強大な権力をふるっていたわけではなく、神社神道がその宗教性を失い、国家からの制度的保障も十分ではなかったことを明らかにしてきた。しかしこれらの研究は主に神社神道や国学者、神道家の視点から「国家神道」を描いてきた。前述のように、明治のキリスト者たちは国家と宗教の関係に関して、神道の側とは異なる思想的伝統を負っていたが、そのようなキリスト者からの視点を参照することによって、近代の神道のあり方についても従来とは異なる知見が得られるはずである。

以上の二つの研究動向の成果の相互参照がこれまで十分になされていなかったこともまた、本研究の一つの背景であった。

2. 研究の目的

本研究は明治期のキリスト者、すなわち明治期プロテスタントの指導的人物が抱えていた神道観を取り上げ、当時の神道観について再検討する試みである。明治政府による「神道」を中心とした初期の宗教政策は、近世以来の「邪教」観を引き継ぎ、キリスト教に対する防衛を主眼としたものであった。大日本帝国憲法によって信教の自由が名目上保証されたあとも、神社非宗教論に基づき、神社は諸宗教を超越する道徳的崇敬の領域とされた。こうした状況のなかで、西洋的な国家と宗教の分離のモデルを歴史的背景として負っていたキリスト者たちにとって、「神道」といかに対峙するかは重要な問題となったのである。上述のように近代日本キリスト教史と神道史の研究はこれまで十分に互いの成果を参照していなかったが、本研究はキリスト者たちの事例を通して相互の研究成果を連結・発展させ、明治期の代表的キリスト者が抱えていた神道観の特質とその背景を明らかにすることを目的としたものであった。

3. 研究の方法

本研究は明治期キリスト者の神道観に関する資料の収集、その分析、および得られた成果の発表という三つの段階によって成り立つ。これらは厳密に時系列順に行われるわけではないが、第一年度に先行研究の検討をふまえた上で、研究の対象となる人物を選定した。そしてその人物に関して、研究協力者の助力も得つつ、資料の収集と整理を行った。

その成果をもとに、主として第二年度からは明治期キリスト者の神道観にまつわる言説の分析を開始した。分析にあたっては思想史的方法を用いた。神道を「宗教」としてとらえているか否か、キリスト教と協調・融合可能と見なしているか否かといった基軸を設定した上で、神道への対応の仕方を類型化し、それと各自の思想的背景や教派的違いの対応関係を明らかにしていくことが基本的作業となった。

しかしこれだけでは単にキリスト教の頂点思想家の言説を列挙するにとどまる危険性があるため、次の点に関してもあわせて考察した。第一に、上述のキリスト者たちが言説を形成した当時の歴史的背景、特に神道に関わる社会制度の状況や、国学者、神道家側の言説、そしてそれらに関する神道史研究の成果を参照した。第二に、当時のキリスト教系雑誌・新聞といったメディアの言説を参照した。第三に、明治期キリスト者たちは自らを近代的な「文明」としての宗教と理解しており、神道の理解においてもその宗教概念が重要な役割を果たしていたため、近代日本の宗教概念に関する研究を参照した。

4. 研究成果

本研究の成果は以下のように要約できる。

(1) 研究協力者の協力を得て、キリスト教と神道の関係にまつわる研究文献の目録を作成した。また、近代日本のキリスト教系の新聞と雑誌を調査し、神道観にまつわる記事の目録を作成した。具体的には同志社大学人文科学研究所監修『キリスト教新聞記事総覧』(日本図書センター)全10巻を調査し、明治期キリスト者の神道観に関わる新聞記事をリスト化した。対象となったのは『七一雑報』、『福音新報』、『福音週報』、『東京毎週新報』、『基督教新聞』、『東京毎

週新誌』、『基督教世界』、『日本基督教新報』、『護教』、『教界時報』であった。また雑誌『新人』と『六合雑誌』の調査を行い、同様に神道に関する記事の目録を作成した。植村正久、柏木義円、海老名弾正といった個々のキリスト教思想家の神道観についての文献の調査も行った。

以上の成果は下記のウェブサイトで公開し、また『福音新報』の資料目録は雑誌上でも発表した。このようなキリスト教徒の神道観に焦点を絞った資料目録はこれまでなかったものであり、後続の研究の基盤となる成果と言える。また以上の調査を通して、近代日本のキリスト者の神道観の一般的な傾向を知ることができた。

(2) 植村正久と海老名弾正の神道観に関する一次資料の調査を行った。とりわけ海老名に関しては、同志社大学人文科学研究所所蔵の「海老名弾正資料」の調査を行った。具体的には海老名の神道に関する論考の草稿や、神道をテーマとする英文の演説原稿、神道関係人物の書簡などを調査し、複写した。また波多野精一や小崎弘道の書簡から、海老名が両者とともに独逸新教神学校の復興に関与していたことが明らかになった。普及福音新教伝道会が運営していた同校は、平田国学におけるキリスト教の影響についての研究で知られる村岡典嗣が一時期在籍していた神学校である。村岡の視点には海老名の神道観との共通性が見られるが、上記の発見は海老名から村岡への影響を示唆するものであり、村岡の学問的背景を考察する上でも重要な意味を有すると言える。

(3) 以上の成果に基づき、明治期の代表的なキリスト教思想家の神道観について研究を行なった。とりわけ対照的な思想家としてしばしば位置付けられる日本基督教会の植村正久と、組合教会の海老名弾正を対象として取り上げた。

まず植村に関して言えば、明治20年代に神社非宗教論が確立されていくなかで、植村は当初からそれと信教の自由との齟齬に着目していた。そのような視点に基づき、明治30年代に入ると植村は明白な神社非宗教論批判を展開していった。ただ、そこで植村が専ら批判の対象としていたのは国家的儀礼における宗教的要素であった。日露戦争後に神社政策が転換し「神社問題」が発生すると、植村は従前の言説の延長線上で神社非宗教論に基づく神社参拝の強制を批判するようになる。しかし同時に明治40年代以降、植村の神道観は変化を見せはじめ、植村は国学者や垂加神道家の言説を参照しつつ、神道に見られる神への態度に、キリスト教受容の基盤を見出すようになった。それは富士見町教会での新嘗感謝礼拝として結実するに至る。

近代的宗教概念や宗教進化論を背景として、植村は明治20年代の段階から皇室祭祀や神社に連関する「宗教」として「神道」をとらえており、内村鑑三不敬事件もそのような枠組みのもとで理解していた。そして明治30年代から大正期に至るまで、かかる神道観は「神道」的国家的儀礼や神社非宗教論に基づく政策への一貫した批判を可能にした。こうした植村の神道観の軌跡は、明治15年(1882)の「祭教学分離」以降、神社非宗教論に基づく神社の位置付けが普及していった社会のなかで、それとは異なる神道概念をキリスト者の一部が保有していたことを示唆する。それがやがて大正期以降、「神社対宗教問題」として表われることになるのである。そこにはキリスト者としての信条のみならず、近代日本社会における異質な存在として国家や他の宗教に対峙していたという状況や、自由キリスト教などとの関係を通して宗教学的言説を早くから摂取していたことが関わっているだろう。

他方で明治40年代以降、植村が神道をキリスト教受容の触媒としてもとらえるようになった背景についてはさらなる探究を行う必要があるが、社会的側面から言えば、日露戦争後の神社政策の転換による神社中心主義の登場や、明治末期以降、神社界においても神道に「宗教的要素」が含まれるという認識が共有されるようになり、宗教学的言説を背景とする加藤玄智らが、「祭教学」にまたがる包摂的な神道概念を提示していったことの影響などが推測される。また新嘗感謝礼拝(大嘗会礼拝)に関して言えば、明治41年(1908)の皇室祭祀令と明治42年(1909)の登極令の制定が関わっている。このように神社祭祀や皇室祭祀、神道概念が新たな意味を持って社会に浸透していくなかで、植村はその趨勢に添いつつキリスト教を広めていくという方向に戦略を転換したと推測される。

他方で海老名弾正に関しては、神道とキリスト教の「融合」を説いたことで知られ、その思想は「神道的キリスト教」と称されることもある。しかし海老名の神道観を再検討した結果、海老名にとっての「神道」は近世の頂点思想家の言説に基づいて再構成されたものであり、それを本質主義的な意味での「神道」と同一視できないことが明らかになった。海老名の場合も植村と同様、背景にあるのは近代的な宗教進化論の枠組みであり、「進化」のとらえ方自体も時期により変化している。それはたとえば水戸学語彙から宗教学的概念への移行であり、また後期になると国学者による唯一神の「発見」を限定的にとらえるようになる。さらに「神道」自体の進化から「敬神」の発展の一つの表われとしての「神道」という枠組みへと変化していったこともわかった。すなわち海老名はその生涯において「神道からキリスト教への進化・融合」という枠組みから徐々に離れていったのである。

一方で海老名もまた地方改良運動後の神社参拝の強制に対しては信教の自由を守る立場から批判を行っていた。以上をふまえると、海老名の言説には植村正久の神道観との共通性が少なからず見られ、「神道的キリスト教」と位置付けられてきた海老名の「特異性」を再考する必

要性が明らかになった。

以上の研究成果をふまえ、本研究では明治期キリスト者の神道観の内実について以下の点を明らかにすることができた。第一に明治期のキリスト者は近代的な宗教概念や宗教進化論を背景として、早い時期から「神道」を一つの宗教としてとらえる傾向があった。それゆえに神社非宗教論や様々な国家的儀礼を、「神道」という「宗教」の強制としてしばしば批判し、信教の自由を守ろうとした。

第二に、宗教進化論の枠組みにより「神道」をキリスト教よりも下位の「宗教」として位置付ける一方、しばしば近世以来の頂点思想家の言説に基づき「神道」を日本の本来的宗教としてとらえていた。そのため、神道を基盤としてキリスト教を日本に根付かせるための様々な試みがなされることになった。それは上述の「神道」の強制に対する批判と並存していた。

第三に、キリスト教と神道との関係をとらえる際には、何らかの宗教による国家的秩序の領導という問題関心が背景にあった。それは明治初期の段階から社会に広く見られる「治教」という発想と連続するものと推測される。

第四に、以上のような神道観の基本的要素は、異なる教派において共通して見られるものであった。たとえば植村と海老名を比較すると植村の方がより信教の自由を重視するといった違いはあるものの、それは相対的な差異であり、むしろ神道観の事例を通して従来教派間の違いとして強調されてきた面を再検討する必要性が明らかになった。

以上の点は従来の研究では明示的に示されていなかったものであり、本研究の達成した成果と言える。これにより近代日本のキリスト教史と神道史の成果を架橋する道筋が示され、また異なる文化間の政教関係の衝突について考察する上での意義ある事例を提供しえた。これらの成果は下記の論文と研究発表によって発表された。他方で上記の枠組みを確認していくために、明治期キリスト者の神道観に関するより多くの事例について研究を進めていくことが今後の課題となるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

齋藤公太、明治前期の「治教」 「国家と宗教」問題を再考する、アステイオン、査読無、第 90 号、2019、pp.67-80

齋藤公太、随神の気風 植村正久における神道観の諸相、國學院大學研究開発推進機構紀要、査読有、第 11 号、2018、pp.33-66

〔学会発表〕(計 2 件)

齋藤公太、海老名弾正の神道観について、神道宗教学会平成 30 年度第 5 回研究例会、於國學院大學、2019 年 1 月 26 日

齋藤公太、植村正久における神道観の諸相、キリスト教史学会第 69 回大会、於北陸学院中・高等学校、2018 年 9 月 15 日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

資料目録：齋藤公太・木村悠之介、近代日本キリスト者の神道観に関する資料目録（1）、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報、査読無、第11号、2018、pp.106-113

ホームページ：「明治期キリスト者の神道観」研究成果公開
(<https://sites.google.com/view/christianityandshinto>)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。